

め  
ある眼

げんさく たけひさゆめじ  
原作:竹久夢二

[https://www.aozora.gr.jp/cards/000212/files/1559\\_7944.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000212/files/1559_7944.html)



ほなし か か ひと たばた みつえ  
このお話を<sup>ほなし</sup>書き換えた人: <sup>か</sup>田畑<sup>ひと</sup>サンドーム<sup>たばた</sup>光恵<sup>みつえ</sup>

ほなし つく てつだ ひと たなかま みせんせい  
お話を<sup>ほなし</sup>作るのを<sup>つく</sup>手伝って<sup>てつだ</sup>くれた人: <sup>ひと</sup>田中<sup>たなかま</sup>麻美<sup>みせんせい</sup>先生

イラストは<sup>そんじ</sup>ご存知、「いらすとや」さんです: <https://www.irasutoya.com/>

なか ごうせい  
イラストの中には<sup>なか</sup>合成<sup>ごうせい</sup>したものもあります。

わたし とも が か  
私の友だちの A は画家です。モデルを  
つか ひと え か  
使って、いろいろな人の絵を描いていま  
す。あるとき かれ ひとり はなし はじ  
めました。



かのじょ き  
「彼女のどこがいいのか」と聞かれて  
かんたん せつめい しょう  
も、簡単に説明できないんです。その少  
じょ とし  
女はモデルとしてはふつうでした。年は  
さい おも しゅう  
17、18歳ぐらいだったと思います。2週

かん わたし かよ き  
間、私のアトリエに通って来ていまし  
た。

わたし かのじょ とく ちゅう い はら  
私は彼女に特に注意を払っていません  
でした。彼女は背は高いけれど、本当  
に、ごくふつうのしょうじょ  
少女だったのです。

かのじょ せいかく べつ とくちよう な こ  
彼女は、性格も別に特徴の無い子でし



おな とし  
た。ほかの同じ年ぐらい  
しょうじょ げんき  
の少女よりずっと元気で  
もないし、ずっとおとな  
しいということもありません  
でした。

ひと はな  
ただ、人に話しかけら

へんじ か  
れると返事をする代わりに、いつも「ま  
あ」と言ってニコッと笑って相手の顔を  
み とき かのじょ め いっ  
見るのです。その時の彼女の眼は、一

しゅん くろめ ぬ み うつく  
瞬、黒目が濡れたように見えてとても美しいのです。

かのじょ へんじ  
また、彼女の「まあ」という返事が、  
「はい」でも「いいえ」でもなく、相手  
の言うことをそっくりそのまま受け入れて、  
じょうず かん  
上手にかわしているような感じにも  
き  
聞こえるのです。

とき あたま おんな  
そのため、時にはとても頭のいい女の  
ひと き  
人のように聞こえるときもあります。そ  
うかと思うと、こども ま ぬ へん  
子供っぽい間の抜けた返  
じ き  
事のように聞こえるときもあります。

おんな ひと ひと み  
さて、女の人が人に見られていること  
ぜんぜん き じゆう ふるま  
を全然気にしないで、自由に振舞ってい  
とき うつく  
る時は、とても美しいものです。

そして、<sup>わたし</sup>私たちは、<sup>とき</sup> <sup>だま</sup>そういう時に黙って  
<sup>おんな</sup> <sup>ひと</sup> <sup>のぞ</sup>その女の人を覗くこと  
<sup>あくま</sup> <sup>てき</sup> <sup>たの</sup> <sup>かん</sup>に悪魔的な楽しさを感じ  
<sup>すこ</sup>じて、少しドキドキ、  
ワクワクするかもしれません。



<sup>ひ</sup>ある日、<sup>しょうじょ</sup> <sup>え</sup> <sup>か</sup>そのモデルの少女の絵を描い  
ていたとき、<sup>え</sup> <sup>ぐ</sup> <sup>なんしょく</sup>絵の具の何色かがなくなっ  
てしまいました。そこで、<sup>わたし</sup> <sup>かのじょ</sup>私は、彼女を  
<sup>ひとり</sup> <sup>のこ</sup> <sup>え</sup> <sup>ぐ</sup> <sup>か</sup>一人アトリエに残して、絵の具を買いに  
<sup>い</sup>行きました。



わたし かえ き かのじょ なに いっしょう  
私が帰って来たとき、彼女は何か一生  
けんめい わたし き  
懸命やっているようで、私には気づきま  
せんでした。そこで、わたし まど そと  
私は窓の外からそ  
かのじょ のぞ  
うっと彼女を覗いていました。

かのじょ いっしょうけんめい まえがみ ゆび ひ ば  
彼女は、一生懸命に前髪を指で引っ張  
っていました。そして、その髪 さき はな  
の先を鼻  
まえ ひ ぱ み  
の前まで引っ張って、じっと見ているの  
です。

かお ま なか はな まえ かみ み  
顔の真ん中の鼻の前の髪を見ているの  
かのじょ め しぜん ま なか よ  
で、彼女の眼は自然に真ん中に寄ってい  
ます。

まるで、<sup>にんじゃ</sup>忍者が<sup>かお</sup>顔の<sup>まえ</sup>前で<sup>りょうて</sup>両手を<sup>あ</sup>合わせて  
<sup>にんじゅつ</sup>忍術を<sup>とな</sup>唱えている<sup>とき</sup>時の<sup>かお</sup>ような顔になっ  
ているのです。



<sup>わたし</sup>私は<sup>おも</sup>思わず<sup>わら</sup>笑ってしまいそうになりま  
したが、<sup>わら</sup>笑いをこらえて、<sup>かのじょ</sup>彼女に<sup>こえ</sup>声をか  
けました。

「ゆかりちゃん。何<sup>なに</sup>してるの？」

彼女は、親<sup>か</sup>しみ<sup>の</sup>を込<sup>こ</sup>めた眼<sup>め</sup>で私<sup>わたし</sup>を見<sup>み</sup>  
て、いつものように

「まあ」

と答<sup>こた</sup>えました。その一瞬<sup>いっしゆん</sup>の彼女<sup>かのじよ</sup>はとて  
も綺麗<sup>きれい</sup>でした。

その後<sup>あと</sup>も、私<sup>わたし</sup>は彼女<sup>かのじよ</sup>の絵<sup>え</sup>を描<sup>か</sup>き続<sup>つづ</sup>けま  
した。でも、つい<sup>とき</sup>にその時<sup>とき</sup>の美<sup>うつく</sup>しさを絵<sup>え</sup>  
の中<sup>なか</sup>にとらえることはできませんでし  
た。